

# 平成30年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－9号)

農林総合研究センター  
平成30年7月27日調査

## 気象経過

<平年対比>

### 【平均気温】

- ・7月第4半旬は、金沢、輪島ともにかなり高い（平年差：金沢+4.1℃、輪島+3.8℃）
- ・7月第5半旬は、金沢、輪島ともにかなり高い（平年差：金沢+3.6℃、輪島+3.7℃）

### 【日照時間】

- ・7月第4半旬は、金沢、輪島ともにかなり多い（平年比：金沢 248%、輪島 258%）
- ・7月第5半旬は、金沢、輪島ともにかなり多い（平年比：金沢 195%、輪島 198%）

### 【降水量】

- ・7月第4半旬は、金沢、輪島ともにかなり少ない（平年比：金沢 0%、輪島 0%）
- ・7月第5半旬は、金沢、輪島ともにかなり少ない（平年比：金沢 0%、輪島 0%）

### 【1ヶ月予報】

7月26日発表の1ヶ月予報（7月28日～8月27日）では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

## 生育概況等

### 【本田の生育】

#### 1. 出穂期

- ・コシヒカリは、加賀地域では7月23日頃から出穂が見られており、7月24日～30日頃と予想され、平年に比べ3～4日程度早い。
- ・能登地域では、現在（7/27）出穂が始まっている圃場も見られ、7月27～8月1日頃と予想され、平年4～8日程度早い。
- ・ひやくまん穀は、既に走り穂の見られる圃場もあり、前年より1～2日早く、コシヒカリの出穂期より8～10日程度遅くなると予想される。

#### 【予想出穂期】

コシヒカリ	加賀：	7月24日	～	7月30日	平年より3～4日早い
	能登：	7月27日	～	8月1日	平年より4～8日早い
ひやくまん穀	加賀：	8月2日	～	8月7日	前年より1～2日早い
	能登：	8月5日	～	8月10日	前年より3～6日早い

#### 2. 草丈

コシヒカリの草丈は平年比101%（加賀地域100%、能登地域103%）と並。

#### 3. m<sup>2</sup>あたり茎数

コシヒカリは、380本/m<sup>2</sup>、平年比97%（加賀地域97%、能登地域98%）と並になっており、既に出穂期を迎えている圃場が多いことから、穂数は平年並に確保される見込みである。

ひやくまん穀は、加賀地域で334本/m<sup>2</sup>、能登地域で389本/m<sup>2</sup>程度となっており、概ね目標穂数（360本/m<sup>2</sup>）は確保される見込みである。

### m<sup>2</sup>あたり茎数（平年、前年）及び株当たり茎数

コシヒカリ	県平均	380本	（平年比 97%	前年比 95%）	20.9	本/株
	加賀	377本	（平年比 97%	前年比 93%）	20.8	本/株
	能登	385本	（平年比 98%	前年比 97%）	20.9	本/株
ひやくまん穀	県平均	362本	（平年比 —	前年比 103%）	20.5	本/株
	加賀	334本	（平年比 —	前年比 100%）	19.9	本/株
	能登	389本	（平年比 —	前年比 106%）	21.0	本/株

## 【病害虫の発生状況】

1. 斑点米カメムシ類（飛翔性カメムシ類）の本田への侵入量が多い
2. 葉いもち及び紋枯病の発生が散見されている。
3. ニカメイチュウ、イネツトムシ、イナゴの被害が散見されている。

### 当面の対策

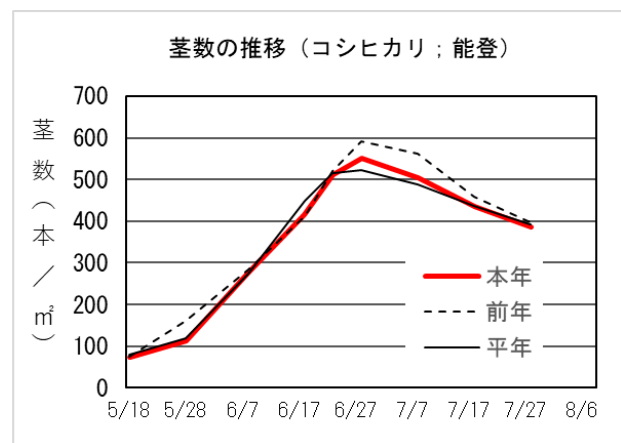
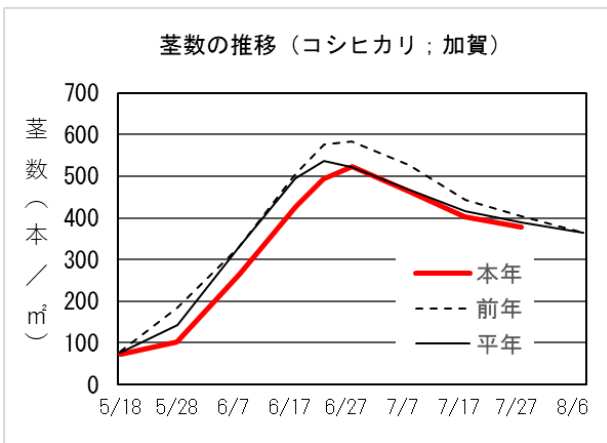
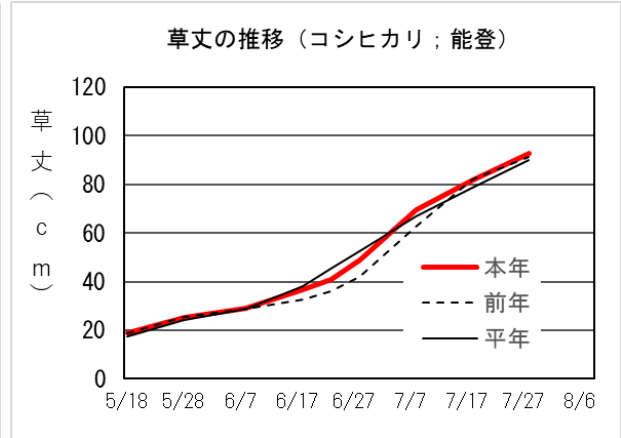
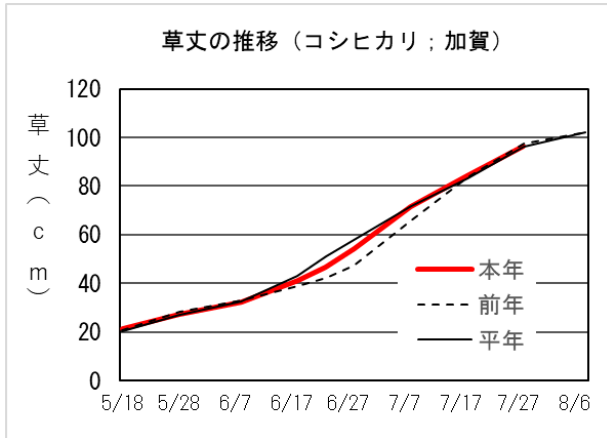
## ～高温から稲を守る飽水管理～

1. コシヒカリの出穂期が平年及び前年に比べ早まり、年間で一番気温の高い時期と重なることから、出穂後は登熟向上を図るため、間断通水（3～4日おきに通水）による飽水管理を刈り取り3日前まで行う。  
**特に、登熟初中期（出穂後7～21日頃）に平均気温27℃以上の高温と水分不足が重なる**と、**白未熟粒・胴割粒の発生を助長**するので**通水を徹底**する。  
なお、強風やフェーンが予想される場合は、あらかじめ入水し、稲体の活力低下を防止する。
2. 高温時期の長期湛水は、根の機能低下をもたらすので行わない。必ず飽水管理とすること。
3. **コシヒカリの下位節間が伸長**しており、**早期に下葉が枯れ上がると株支持力が低下し倒伏を助長**するため、**飽水管理を徹底**する。
4. **高温・少雨が続けている**ことから、**用水をため池に依存している地域**等では、**計画的な水利用**に努める。
5. 斑点米カメムシ類の本田への侵入が確認されており、高温・乾燥が続くと本田への侵入がさらに多くなると見込まれるので、斑点米の発生を防止するため防除を徹底する。  
防除は、早生や7月中に出穂するコシヒカリでは、出穂7～10日後と14～17日後の2回防除を徹底する。また8月以降に出穂する稲では、出穂7～10日後の防除を徹底する。  
なお、防除後もカメムシ類の本田侵入が確認された場合は追加防除を実施する。
6. 今後の畦畔等の除草については、カメムシ類の本田侵入を助長するので原則行わない。但し、やむを得ず除草を行う場合は本田防除の直前に行うこと。
7. 穂いもちの発生を防止するため出穂前後の基幹防除を必ず実施する。
8. 出穂期の遅い圃場（晩植、直播、晩生品種等）で、葉いもちの発生が認められた場合には直ちに防除を実施する。
9. コブノメイガについては、今後出穂を迎える直播、晩植、晩生品種ほ場を中心に巡回し、被害を認めたら直ちに防除を実施する。
10. **高温登熟年**は、籾黄化の進みが早く、胴割粒が発生しやすい。
  - ① **籾黄化率が80%から収穫を開始**し、**85%までに終わると胴割粒の発生リスクを軽減**できる。
  - ② 早生品種は登熟積算気温**900～950℃**、中生品種は**980～1,030℃**、ひやくまん穀は**1,100～1,150℃**を**刈取り適期期間の目安**とする。
  - ③ 刈取適期を登熟積算気温から試算する場合は、日平均気温の平年値に1日当たり2℃～4℃程度加算して積算することが望ましい。
  - ④ 特に五百万石、石川門等の酒造好適米は高度精白されることから、軽微な胴割れでも精米過程で砕けてしまうことに留意し、適期刈取を厳守する。
11. 共乾施設においては、胴割粒の発生リスクが最小になるように各品種の受け入れ最終日を設定し、中生・晩生品種が刈遅れにならない運用計画を作成する。なお、コシヒカリ

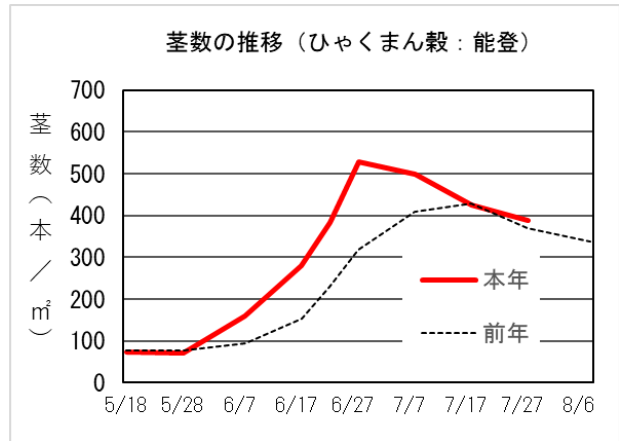
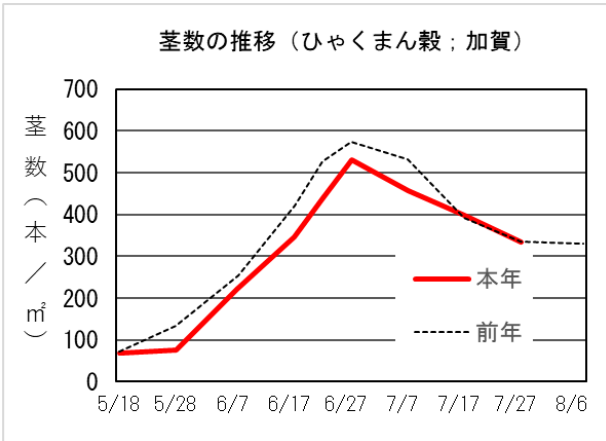
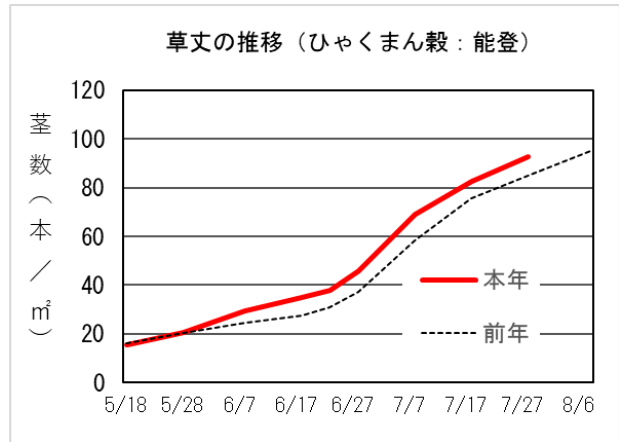
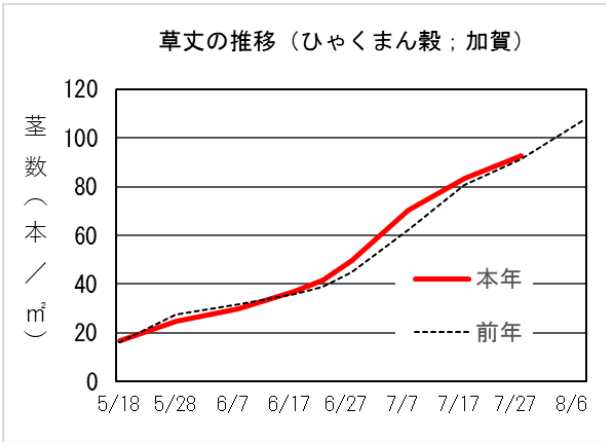
の出穂が早まっていることから、早生の刈終わりからコシヒカリの刈始めまでの間に余裕がないことに留意する。

<参考：コシヒカリ、ひやくまん穀の地域別草丈および茎数の推移>

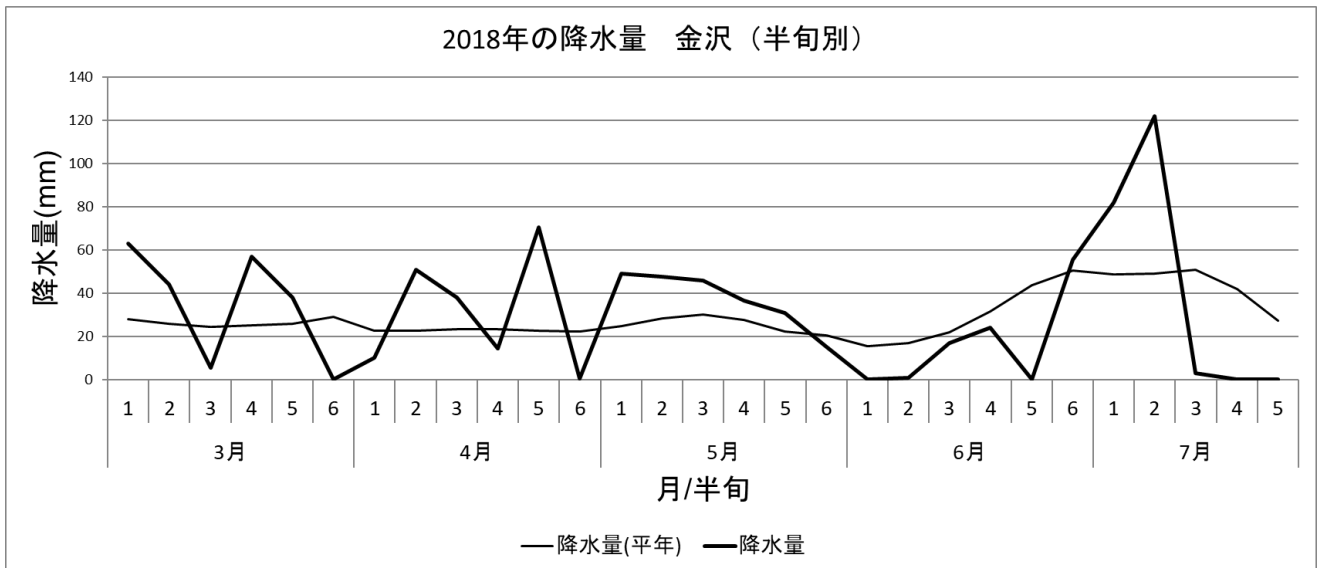
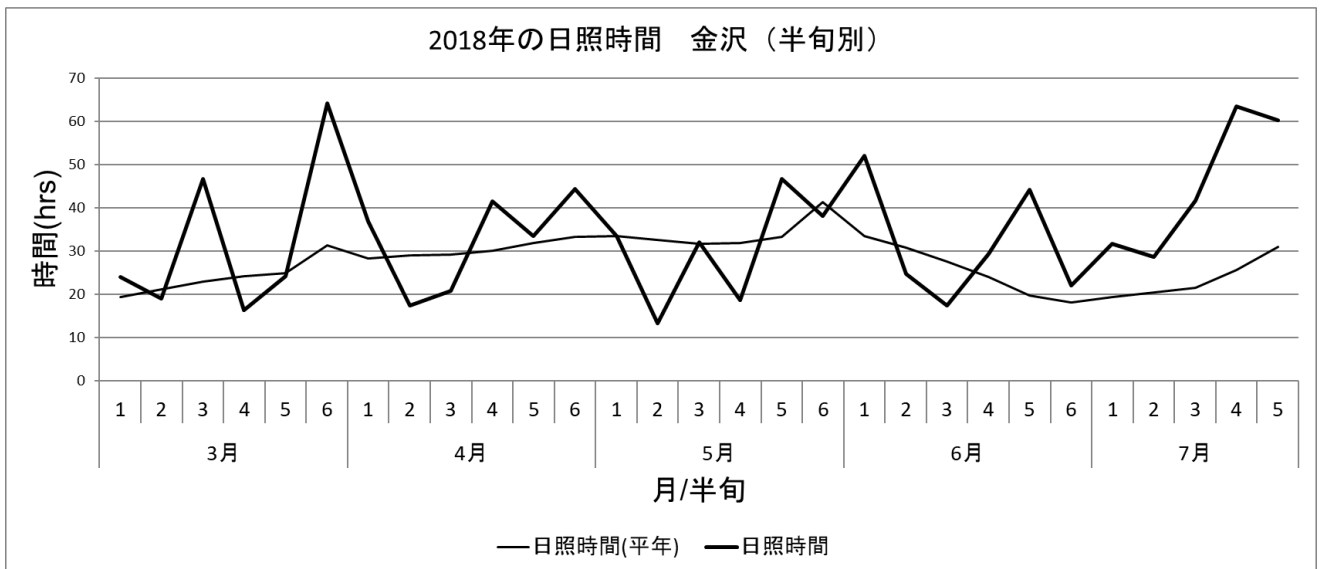
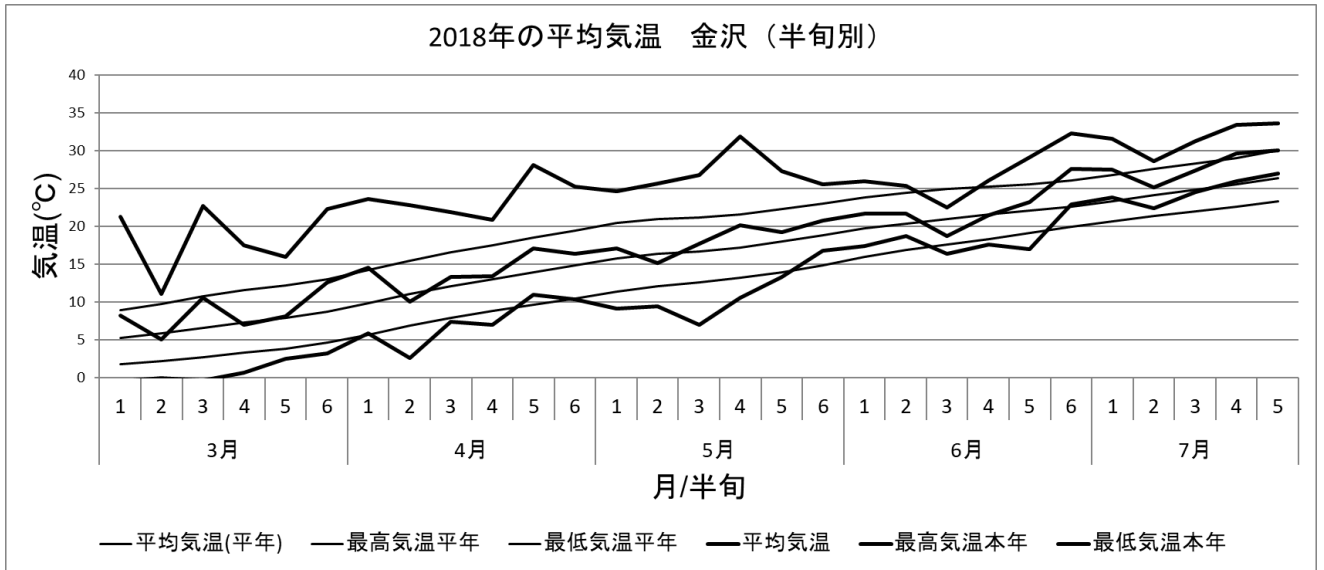
- ・コシヒカリの草丈は加賀地域、能登地域とも平年及び前年並となっている。
- ・コシヒカリの茎数は平年及び前年並となっており、穂数は平年および前年並に確保される見込である。



- ・ひやくまん穀の草丈は加賀地域で前年並、能登地域で前年よりやや長くなっている。
- ・ひやくまん穀の茎数は前年並みとなっており、概ね目標穂数（360本/m<sup>2</sup>）を確保できる見込みである。



# 気象経過イメージ（金沢気象台）



# 気象経過イメージ（金沢気象台）

